

「遊びの都市」における住教育に関する研究 - 「こどものまち」と「Mini-München」の日独比較を通して-

花輪由樹（京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程）

■背景：

人々が主体的に行動するには、「自ら（意識的に）」もしくは「自ずから（無意識的に）」動き出してしまうようなくっかけ>が存在し、それを引出す役目はファシリテーターと呼ばれる。ファシリテーターは人と場所との対話が強く望まれるまちづくりには欠かせない存在であり、普通は、人間がその役目を担うものとされているが、本研究ではそれが環境自体に組み込まれているという仮説をもつ。そして、人々が思わず関わり続けてしまうような場所のあり方を、「遊びの都市」の事例から探ろうと試みた。「遊びの都市」とは近年日本で急速に広まる子どもが仮想都市を創る遊びで、これは1979年にドイツのミュンヘンで始まったものである。

■目的：

本研究は、「遊びの都市」が子ども達にとって自分達の「まち」をよりよくしようと考える住教育の機会をもつことに注目し、これが(1)日本とドイツの「遊びの都市」では具体的にどのように存在するのか、(2)そして子ども達の行動を促すくっかけ>が「遊びの都市」の環境の中どのように組み込まれているのか、(3)そしてこの環境が今日の住教育に示唆をもたらすものとは何かを考察することを目的とした。

■方法：

住教育の視点から「遊びの都市」における子どもの「まち」づくりの参与状況を探るため、まずは住教育の論考整理を行い、日独の「遊びの都市」における準備段階と当日の「まち」づくりの実態調査によって、住教育としての考察を行った。なお日本の「遊びの都市」については、子どもが準備を行う「まち」を①日本型、大人が準備を行う「まち」を②ミュンヘン型として、③ドイツのMini-Münchenと合わせて3分類の調査を行った。

■結果：

1. 住教育について：

住教育とは、住まいにおける生活の主体的態度の育成だけでなく、住まいの伝えたい教育的メッセージの伝承という、学習的要素と教育的要素の両者が期待されていることが明らかになった。

2. 「遊びの都市」の実態調査について

①日本型：子どもによる手作り感があふれ、子ども目線で作られたポスターや店の仕組みが目立つ。各ブースには準備段階から関わって来た子どもがリーダーとなっており、彼らが中心となって店や「まち」を盛り上げていた。

②ミュンヘン型：大人による企画のためデザイン性に優れており、テーマパーク的な提供型の要素が強く、子ども達はまず「まち」を把握して遊びを制覇していくことに集中し、そこで満足してしまう様子もうかがえた。

③Mini-München：職業教育や民主的な市民教育が意識された大人による教育的な企画であるが、子ども達自身でそれを掴み取れるように、3週間かけてじっくりと自立を促す仕組みがある。市民集会や選挙などを通して民主的に「まち」を変えていく仕組みもあり、子ども達は積極的に政治活動に参加していた。

3. 「遊びの都市」の住教育的考察と今後の課題：

「遊びの都市」を通じて子どもが主体的になれる環境とは、3つのことが必要であると明らかになった。それは、ア)「まち」への不満や不足を感じさせ、その考えを共有する場があること、イ) 教育的メッセージは直接伝えるのではなく子どもが遊びを通じて汲み取れるように環境に設定しておくこと、ウ) 子どもの行動を促しサポートできる住教育者がいるということ、この3点が「遊びの都市」から得られた住教育的な示唆である。

今後の課題と展望としては、「遊びの都市」を通じて育まれているであろう、ウ) 子どもの主体性を促す住教育者という存在が、その技を専門家としてではなく、一般市民の教養のリテラシーとして誰もが身につけられるようになることが望まれる。したがって、それがどうしたら可能となるのか、そして実社会の中に浸透していくことができるのか等の検討が必要である。また近年、各自治体による「子ども条例」や、住民参加型まちづくりの子ども参加など、具体的な施策との関係性の中で、その方法の模索もさらに目指されるべきだろう。またミュンヘン市で2000年より行われてきた「子どもに優しい都市」の政策に、「遊びの都市ミニ・ミュンヘン」の存在がどれほどの影響力を及ぼしていたのかについても、日本の今後の住教育環境の整備を考える上では究明されるべき点であると考えられる。